

書評

疋田雅昭／日高佳紀／日比嘉高（編著）

『スポーツする文学——一九二〇—三〇年代の文化詩学』

高橋豪仁

この本のカバーには傾いた白い楕円が描かれ、その楕円から放射線状に太い焦茶と赤の線が交互に延びている。楕円が競技場を、そして太い線が観客席を表しているようにも見える。あるいは、赤い線がスポーツで焦茶の線が文学で、それらが交わる楕円が本書なのかも知れない。白い楕円の中には、「大正から昭和初期、モダニズムと大衆文化の時代」。

新聞や雑誌、ラジオ、レコードなどのメディアを介して、文学とスポーツはそれぞれの最前線で交錯した。レトリックと身体が衝突し、神話とアスリートが握手をかわす（文学とスポーツのアリーナ）を物語や表象などから多面的に分析する。現代に続くスポーツをめぐる文化の配置図のルーツは、ここにこそある。」というキャッチコピーが記されている。本書の内容を的確に表現しており、看板に偽りなし、である。

本書は一〇の論考から成り、それらの論考

は四つのセクションにまとめられている。最初のセクションには、「都市空間のなかに浸透したスポーツとそこに集まった人々を素描し、モダニズムの内実を再考しようとする論考」が集められている。以下、簡単に紹介する。

・青木亮人「スケートリンクの沃度丁幾」

かつてスケートはスキーと同様に自然の中で行われるものだった。大正末期から昭和にかけて「スケート・鉄道・地方の湖」という図式が変容し、主要都市にスケート場が開設された。青木氏は山口誓子の「スケート」句群（『凍港』一九三二年）を取りあげ、この連作俳句に作者の「カメラの目」が存在しており、その目を通して都市部の人エリンクのスケートの華やかさと貧相さの現実が構成されていることを指摘している。

・天野知幸「時を忘れる愉楽」

ベビー・ゴルフ（バター・ゴルフ）場が日本

に初めて作られたのは一九三〇年だった。それはいわゆる近代スポーツとしてではなく、余暇として楽しまれる大衆娯楽としてのモダン・スポーツであり、一過性の流行だった。天野氏は、一九三〇年代の文芸作品に題材として採用されるベビー・ゴルフの都市性、手軽さ、演技性といった浮遊感が心理描写に敷衍されて用いられていることを見いだしている。

・西山康一「肉体」におびえるとき

一九〇二年日本に紹介された卓球は競技としてではなく、遊技・娯楽として普及した。西山氏は武者小路実篤の『友情』（一九一九年）を取りあげ、友人や親戚で催された内輪の「ピンポン大会」で、女を相手に男が本気でゲームをして打ち負かしたシーンを解釈して、男性のホモソーシャルな欲望やその価値観を見いだしている。さらに、氏は論考を進め、その背景に当時の近代産業社会特有の

ジェンダー構成があり、「肉体」が強調される戦闘主義的・勝利至上主義的な競技スポーツが正当化されるために「精神」修養主義的なスポーツ観が生まれたことを指摘する。そして、時として「肉体」の快楽が「精神」を制御しきれなくなることにも言及している。一つの小説を通して、当時の社会的価値観や競技スポーツの本質を見事に説明している。

二つめのセクシオンでは、「メディア上で展開されたスポーツをめぐる諸現象」が考察されている。

・日比嘉高「声の複製技術時代」

日本でラジオ放送が始まったのは一九二五年であり、この二年後に大相撲の巡業や全国中等学校優勝野球大会などのスポーツが中継放送された。日比氏は、大量の受信機を通して複製されるラジオと、蓄積性と縦覧性という特色をもつ既存の新聞・雑誌の活字メディアが補充しあうことによって、スタジアムで直接スポーツを観戦するのとは異なる、より深みのある「スポーツ空間」が、スポーツメディアの受け手の中に出現することを指摘する。

・松村良「ゴムボールを手にした子供たち」
日本の野球には硬式野球と軟式野球があ

り、前者は一八七〇年代にアメリカから移入され、学生野球、プロ野球として発展した。一方、後者はゴムボールを使用するものであり、少年野球として普及した。松村氏は、一九一四年に創刊された戦前最大の少年雑誌である「少年倶楽部」を取りあげ、そこに掲載された「野球もの（野球を扱った小説・記事・口絵など）」を丹念に検討している。一九一〇年代から二〇年代前半においては、この雑誌の読者である小学生たちが興じる軟式野球に関するものが掲載されていたが、二〇年代後半では精神修養や克己が強調され、立志の手段としての硬式野球の世界が描かれるようになり、そして三〇年代になると中学野球から再び軟式野球が題材となってくることに明らかにされた。

・日高佳紀「テニス文芸のレトリック」

明治維新期に、日本で初めて硬式テニスが行われた。しかしながら、日本でのテニスの普及は、硬式テニスではなく、一八九〇年頃に日本で創案された軟式テニスによるものだった。学校体育をベースにして地方に伝播した軟式テニスに対して、硬式テニスは一九一三年に慶応大学が国際交流の必要性から庭

球部の硬式化に踏み切つて以降、数年の内に国際競技会に日本人が参加するようになり、一九二〇年代になると国際試合でメダルを獲得する活躍を見た。日高氏は、一九三三年に創刊されたテニス専門の月刊誌「テニスファン」を取り上げ、テニスの大衆化と高度化（国際化）の現実に対して、読み物としてのテニス文芸がいかにシンクロしているかを見事に描いている。

三つめのセクシオンは、スポーツする女性の身体に、「同時代のジェンダー規範やナショナリズムがどのような意味を書き込んでいったのか」を論じている。

・笹尾佳代「変奏される〈身体〉」

女子中等教育機関の整備と連動し、一九二〇年代になると全国各地で女子スポーツの競技会が開催されるようになった。そして、一九二六年七月、スウェーデンで開催された第二回万国女子オリンピック大会に参加した人見絹枝は走り幅跳びで世界記録を出して優勝し、立ち幅跳び優勝、円盤投げ二位、百ヤード走三位という活躍で総合優勝した。同じ年の一月に開催された明治神宮大会では、双子のスプリンター寺尾正が五〇メートル走で日

本新記録、妹の文が一〇〇メートル走で世界新記録を更新する活躍を見せた。笹尾氏は、寺尾姉妹をモデルとして書かれた少女小説「庭球選手とのローマンス 閃く応援旗の波（一九二四年）」と、人見選手をモデルとした「火星の女」（一九三六年）を用いて、女子スポーツ選手に向けられた「まなざし」から、当時の社会意識をあぶり出している。

・杉田智美「水際のモダン」

一九三一年、競泳専用と飛込専用と施設を備え収容人数一万三千人の神宮プールが完成した。一九三六年、ベルリンオリンピック女子二〇〇メートル平泳ぎで前畑秀子が優勝した。一方で、一九三一年に銀座の五階建てビルの地下室にスプリングボードを設置した男性専用のプールがオープンし、この娯楽性の高い地下プールにモボ（モダンボーイ）が集まった。また、水着姿の女性がグラビアを飾るようになったのも一九三〇年代だった。こうした時代にあつて、杉田氏は、モダンではなく近代資本主義的な価値をまとう競泳女子選手が、プールの水際で一列に並んだ構図の写真が多いことを指摘し、それはちょうどダンスホールで踊りの相手をまつ女性ダンサー

の張見世と同様に、男のまなざしに消費されていると言う。そして、小説「混沌未分」（一九三六年）を取り上げる。主人公の女性水泳教師、小初が遠泳大会の日に沖に向かって泳ぎ出す場面を、魚にならなくてもなれない女の体が、何にも支配されない場所を求める行為として解釈する。

四つめのセクションでは、「国家規模あるいは国際規模でイベント化が進行するスポーツ競技への文学の応答」を扱っている。

・西川貴子「わたし」と「わたしたち」の狭間

日本で初めてのマラソン大会は、一九〇九年の大阪毎日マラソンだった。新聞社がスポーツイベントを企画し、その記事によって購読者を増やすという経営戦略の一環としてマラソン大会が始まったのである。そうしたメディア報道の語りの中で、「走る」表象が作り出された。西川氏は、一九一七年の東海道駅伝競走に関する読売新聞の掲載や、一九二〇年代から三〇年代の少年向け雑誌「少年倶楽部」・「日本少年」から、以下の三つの語りを見いだした。それは、①日本の起源の歴史を想起し、自らその歴史を刻む身体、②

走りきったあとの充実感を導くところの苦しむ身体、③周囲とコミュニケーションを取りながら、共同体と一体となる（国家の歴史を刻む）身体、である。一方で、こうした語りに相容れない「走る」表象が、牧野信一の作品「或る日の運動」（一九二五年）、「或る日の運動」の続き」（一九二五年）、「駆ける朝」（一九二九年）に存在することを西川氏は指摘する。それは、スポーツすることができないことによる、あるいはスポーツをしても他者とうまくコミュニケーションがとれずに、共同体の一員になれない「私」のありようであり、さらには、自分自身の存在すらも良く分からないという「私」のあり方である。

・疋田雅昭「スポーツしない文学者」

一九三二年のロサンゼルスオリンピックに先立ち、東京朝日新聞が行った「オリムピック派遣選手応援歌」の懸賞募集には、四万八千通の応募あり、選ばれた詞に山田耕作的曲がつけられレコードが発売された。メディアの演出によって作られた「日本人」像は、上から一方的に押しつけられたものではなく、大衆の側から沸き上がった「期待の地平」にしっかりと支えられていた。そして、スポー

スポーツ報道は事実をそのまま伝えたのではなく、感動が増幅されるように文学的修辭が施された文体によって報道された。スポーツ報道には、武者小路実篤や西條八十などの文学者が動員されていたのだ。文学者はメディアと国際的スポーツ祭典の共犯に荷担していた。正田氏は、こうした時代にあつて発表された田中英光の「オリンピックの果実」（一九四〇年）を「異常」な小説であると言う。作者の田中はロサンゼルスオリンピックの漕艇選手であり、同じ大会に参加した女子選手への思いを書いた回想録がこの小説である。一般に純愛小説であると評されるこの作品について、

正田氏は、集団化された日本人像に抵抗するか、それとも迎合するかといった二者択一的な立場から抜け落ちる部分を、祭典の熱狂から抜け落ちる「オリンピックの果実」として論じている。

以上、簡単に本書の内容を紹介した。本書に収められた論考の多くは、まずそこで扱うスポーツの当時の実状を説明した後、そのスポーツがどのように文芸作品に描かれているか、つまり「スポーツを表象する言葉、そ

れが生み出す意味、それを語り伝える修辭」について論じている。スポーツ社会学を専門とする評者にとつて、どの論考も大変興味深いものであり、文学作品を通して一九二〇、三〇年代のスポーツにまつわる物語を知ることができた。

印象に残っている論考のひとつに笹尾氏のものがある。スポーツ社会学の研究では、スポーツという窓を通して社会のあり方を説明しようとするのだが、笹尾氏は実在の女性スポーツ選手に向けられた「まなざし(gaze)」を解釈することで社会のあり方を論じている。当時の人々の「まなざし」を小説の中に求めることは有効な方法だと思う。小説はその作者が勝手に創つたフィクションではなく、読み手がどのように物語をdecodeするのかわき、書き手が綿密に想定してencodeしたものである。当時の社会の大衆の意識がそこに凝縮されていると言えるだろう。氏が紹介している星野純子の「庭球選手とのローマンス」のストーリーは、テニスに熱中する体育系少女が、スポーツに傷つき、やがて安住の場である文化系少女の場に戻っていくというものである。

この物語は、当時陸上競技で活躍していた寺尾姉妹が引退して結婚した時に、「スポーツで健康的な母体を手に入れた後の結婚」として報道されたことと内容的に符号している。元来スポーツは男性のジェンダーを志向するものであり、一九二〇年代に初めてスポーツの世界に女性が参入したとき、既存のジェンダー規範が修正されるのではなく、むしろそれによって補強されることとなったのだ。また、笹尾氏は、探偵小説「火星の女」を題材として、そこに、人見絹枝選手がナショナルなものに取り込まれ、男性ジェンダー化と女性ジェンダー化のアンビバレントに受苦する姿を読み取っている。題材も探偵小説だが、笹尾氏の解釈も探偵小説のような見事な解き明かしだった。

日高氏の論考も大変興味深く読ませて頂いた。一九二五年に創刊されたテニスの専門誌「ローンテニス」はトーナメントなどの試合結果を網羅的に報じるものであったが、一九三三年に創刊された「テニスファン」はテニスの歴史や国際的な有名選手の紹介などの読み物を全面に押し出した編集方針と紙面構成を採用しており、当然のことながら、日高氏

「テニスファン」に論考の題材を求めている。「テニスファン」第三号（一九三三年一月）

の巻頭の扉に六つのスローガンが掲げられ、筆頭に「スポーツと文学との握手」とある。

日高氏の論考はスポーツと文学がどのように握手しているかを明らかにしている。また、メディアとして展開された文学の機能を検討することは、「テニス」という競技の個別的状況を明らかにするだけではなく、スポーツ一般と文学、あるいは文学的言説の関わりを考える手がかりとなろう」と日高氏は言う。スポーツ社会学の領域でもしばしばスポーツ専門誌を研究資料として用いるが、多くの場合はそれを通して当時のスポーツ実施の状況を知るところにとどまっている。日高氏は、「テニスファン」に連載されたコント小説「羅武君の球歴」を取り上げ、これを読むテニス愛好者たちが主人公の羅武君を身近に感じることとでテニス界と読者が同じ地平に置かれることを指摘している。このようなテニス文芸において作られる物語によって、テニス文化が啓蒙されるのであろう。そして、一九三〇年代の日本テニスの黄金期が終焉を迎えようとしたとき、「テニスファン」の言説は佐藤次

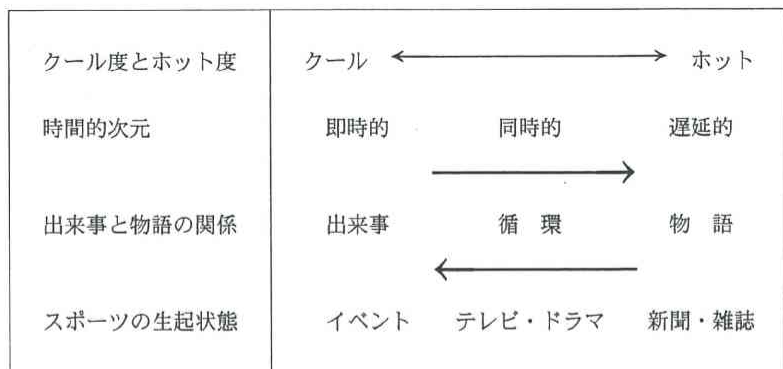
郎選手の死を安易に物語化しなかったことに日高氏は言及している。

おそらく、テニス専門誌「テニスファン」を読む者は、実際のテニスをしたり見たりすることもあつたはずである。本書の「はじめに」に「スポーツを見ることは、そもそも文学を読むことに似ている」と書かれている。確かに、実際のスポーツを見ることも、スポーツ文芸を読むことも、たとえスポーツ・メディアの受け手が観客であろうとも読者であろうとも、それぞれの文脈に依じて読解と意味づけがなされているのである。だが、スポーツ事象そのものとスポーツ文芸とは、メディアとしての差異がある。ここで、スポーツ・メディアについて説明しておこう。マクルーハンは、メディアを「熱いメディア」と「冷たいメディア」に大別した「マクルーハンの『メディア論—人間拡張の諸相』、一九八七」。その分類のために、①情報精細度の高低、②単一感覚が全身感覚か、③補完度の高低に参加度の高低、という三つの基準が示されている。ホットな（熱い）メディアとは、単一の感覚を「高精細度」(high definition)で拡散するメディアのことである。データが十分に

与えられているので、メッセージを受け取る側で補完する部分が少なく、参加度が低い。逆に、クールな（冷たい）メディアは、情報の精細度が低いので、メッセージの受け手が補完する部分が多い。そのため、受け手の参加度は高くなる。たとえば、電話やテレビはクールなメディアであり、それに比べて、アルファベット活字や書物はホットなメディアとなる。

ビレルとロイは、この二分法をメディア・スポーツに適用した[Birrell and Loy, Sport, Culture and Society, 1981]。イベントの観戦が最もクールなメディアであり、スペクテーターの感覚的参与を最も必要とする。テレビはそれより少しホットで、ラジオはさらにホット、新聞は最もホットなメディアであると規定している。

亀山佳明「亀山、『スポーツの社会学』一九九〇」は、プロ野球において感動を生み出すようなブレイを「出来事」と呼び、球場における「出来事」の現実がメディアとして部分的に切り取られ、強調されることにより、「物語」となることを指摘している。物語(narrative)とは、人間の行動をストーリーと



スポーツ・メディアの相対的（クール性・ホット性）

（ビレロとロイがスポーツ・メディアの相対的なクール性を示した図に、筆者が加筆したもの。）

プロット（事実と事実との相互の関連性を説明するもの）をもつ様式で叙述したものである。また亀山は、多くの物語を介することによって、私たちがプロ野球を見る感受性は特定のボタンをもつものとして形成されており、「出来事」と「物語」は互いに循環する関係となっていると指摘する。この出来事と物語との関係を、前述のメディア・スポーツのホットとクールの尺度に照らし合わせるならば、図に示すように、出来事はクールなメディアであり、物語はホットなメディアに相当する。

筆者は、一九九八年七月五日にグリーンスタジアム神戸でオリックスのホームゲームを見に来ている観客を母集団とするアンケート調査を実施した。被調査者全体の三一・七％が神戸市在住であり、神戸市内に住んでいる人（二七・二人）に限定して、「神戸の人たちは、阪神淡路大震災の年、オリックスによって勇気づけられましたか」と尋ねたところ、「大変勇気づけられた」が六七・四％、「少し勇気づけられた」が二九・五％と、合わせて九七％の人がオリックスによって神戸の人たちは勇気づけられたと回答した。「阪神淡

路大震災で多くの人が被災したが、彼らは地元球団のオリックス・ブルーウェーブの活躍によって勇気づけられた」という集合的な記憶は、ひとつの物語の形態をとっている。地震ではないが、被災した人々を励ますものとして地元球団を捉える物語は、過去にも存在した。エッセイストの佐々木久子は「広島で生まれ広島で育った私は、原爆をうけて灰となった古里に市民の希望と活気をうむためにうまれたカープを、終生愛しつづける」「明治生命保険相互会社『野球大好き関西人』、一九九三」と述べている。また、中沢啓治の『広島カープ誕生物語』『中沢、一九九四』のカープには、「原爆が落とされ、焼きつくされたヒロシマの町。人々は、たくましく復興への道を歩みはじめた。…（略）…その頃、初の市民球団『広島カープ』が市民の熱意と応援で創設され、人々の心は期待で躍る」とある。ここで断定することはできないが、例えばこうした過去の物語から得られた定式が人々の中に沈殿しており、これに基づいて「オリックス優勝」という出来事が経験され、「被災者はオリックスによって勇気づけられた」という物語が形成されるのであろう。このよう

に「出来事」(スポーツ事象)と「物語」は循環の關係にあるのだ。

日高氏は「テニスファン」創刊号の巻頭に掲載された、松岡謙の「テニスの進む路」を紹介している。そこには「デヴィス・カップ戦は国威国力のバロメーターなのであつて、その代表選手はつまりその国力のシンボルなのである」という一文がある。そもそもスポーツは非日常的な時間空間において身体的能力の優位性を競うゲームであるが、かえつてそうしたシンプルな枠組みをスポーツが持つが故に、社会的諸勢力がそれを利用したり、また、様々な物語がそこに付与されたりするのである。上述のマクルーハンの理論に従うならば、スタジアムにおけるスポーツ情報は観客によつて多様な解釈がなされるのだが、それに比べて、スポーツ文芸などの活字メディアの場合は、読み手の補完度が少ない物語が読者に提示されるのである。こうした物語を内面化した人が、デヴィス・カップの日本人の試合を見れば、「物語」と「出来事」の相乗効果により、一層この物語が強化されるのである。

ただし、活字メディアであつても、読者はそれぞれの生活の延長線上にその物語を読むのであり、必ずしも一義的なメッセージとして解釈される訳ではない。また、日高氏が雑誌「テニスファン」の小説において、既存の物語に抗う言説を見いだしているように、メッセージの送り手は常にステレオタイプ化した物語を生産している訳でもない。むしろ、杉田氏、西川氏、疋田氏の論考を読んで思つたのだが、スポーツ文芸の世界では、複雑なものを複雑なままに、混沌としたものを混沌としたままに、スポーツをする人間が描かれる場合もあるのだろう。

紙幅が尽きたので、その他の論考について言及することができなくなつたことをご容赦願いたい。文学の専門家や学生だけでなく、人文社会学的な観点からスポーツを研究する者も、本書から多くのものを学ぶことができる。本書の書評を書く機会を与えられ、改めてここに心からお礼申し上げる。

(A5判三三八頁、二〇〇九年六月・青弓社刊)

(本学保健体育講座教授・スポーツ社会学)